

題名 アカウミガメの故郷、明石

作者名 岸田 航(きしだ わたる)

学校名 滝川中学校

学年 二年

瀬戸内で、唯一アカウミガメの産卵が見られた明石には、ウミガメサンクチュアリーがあります。

産卵しに来るアカウミガメの保護のため、夕方から海岸でジェットスキーや花火を禁止しているそうです。

平成二十六年には、望海浜でアカウミガメの産卵がみられたそうです。

令和四年にも、何度かアカウミガメが保護されたニュースを目にしましたが、その後、明石・瀬戸内での産卵は見られていません。

ぼくが生まれる前に他界した曾祖母は、明石の林崎海岸の近くの出身ですが、ぼくの母から、「おばあちゃんが小さいとき、浜でウミガメを見たことがあったと話していたよ。」と聞いたことがあります。昔は、砂浜にウミガメがいることも珍しくなかったのかもしれない。

ウミガメと共存できる環境、ウミガメが産卵に訪れる環境には、どんな条件が必要で、明石にウミガメの産卵を呼び戻すことができるのでしょうか。

ぼくが見たアカウミガメの産卵を参考に考えてみたいと思います。

ぼくは、小学校三年生の時、家族旅行で徳島県にウミガメの産卵の見学と、ウミガメの甲羅洗いのボランティアにいきました。

そこは、徳島県的美波町というところです。ウミガメの産卵場所として有名で、町内には、ウミガメの博物館がありました。

宿泊した旅館は、海岸に面して建てられ、ウミガメの産卵シーズンには、夜、車の通行も禁止されていました。車のヘッドライトがウミガメの上陸に悪い影響を与えるらしいのです。深夜、母が登録したウミガメルというメールサービスから、海岸にウミガメが上陸したというメールが届きました。宿泊した旅館を一步出るとそこは、真つ暗な世界でした。頼りない懐中電灯の明かりを頼りに、ウミガメ産卵場所へと移動しました。波の音のほか、何の音もしません。父も母も弟も、静かに静かに暗闇を進んでいきました。

とても暗い懐中電灯を持ったおじいさんが、一人ウミガメの産卵を見守っていました。毎晩、交代で海岸を監視しているそうです。

そこには、体長一メートルを超える大きなアカウミガメがいて、後ろひれで、砂をかいて穴を掘っていました。

おじいさんの話では、ちょうどいい場所が見つかるまでもう数回、近くを掘っては場所を変え、いまのところ、やっと掘り進めることにしたんだそうです。

やわらかい砂は、かいては崩れ、かいては崩れを繰り返しながら、長い時間をかけて、五十センチくらいの深さまで掘り進んでいきました。

ウミガメの甲羅はすっかり砂まみれでした。

そして、ぼとぼととたくさんの卵を産み落としていきました。

卵を産む時間はさほど長くはなかったですが、前にテレビで見たように、ウミガメは涙を溜めていたように記憶しています。

その後、器用に後ろヒレで砂をかぶせ終わったころには、あたりは明るくなってきていました。

ウミガメは、あたりを数回、円を描くように回ったのち、少し桃色っぽい明け方の空が広がる海に向かい振り向くことなく消えていきました。

その時のウミガメの後ろ姿をぼくは今も忘れていません。そして、波がウミガメをさらって、姿が見えなくなりました。

ぼくは弟と二人で、しばらく立ち尽くし、その神秘的な姿を見送ったのを覚えています。

ぼくたちが見たウミガメは、これまでに何度かこの海岸にやってきたことのある個体だと、おじいさんは教えてくれました。

初めて見た野生のウミガメは、水族館で見たものより大きく、甲羅にはいくつもの寄生虫などが付着していて、なにより、力強かったのを覚えています。

この経験をしてから、それまで魚にしか興味がなかったのに、ウミガメのことにも関心を持つようになりました。

ウミガメの産卵を呼び戻すうえで、まず、明石で産卵があったことの知名度が低いことが挙げられます。

知名度を上げて関心を持つ人を一人でも多くすることが必要です。

学校の友達に、ウミガメの産卵が明石であったことを話しても誰一人として知っている人はいませんでした。明石の産卵場近郊の中学生なら知っているかもしれませんが、すぐ隣の神戸市では、それ程知られていないのです。ウミガメのことについて知らないと環境の保護を訴えても、人々の協力は得られません。環境は、そこに住む人だけの力で整えるものではありません。レジャーで訪れる人、近隣を通行する人、上流の河川を利用する人など、幅広い人たちの協力が必要となります。

アカウミガメの餌となる貝や小魚など、大阪湾から明石海峡にわたる海的环境にも視野を広げて考えるべきだと思います。

次に、産卵場の明るさ制限です。

徳島の海岸で実践されているように、夜間の厳しい照明の制限が必要です。

ウミガメは明るさにとても敏感です。夜の海は月明かりが反射し海のほうが陸より明るくなります。ウミガメは、産卵地である砂浜を、暗いほうが陸であると判断して上陸するそうです。徳島で、ウミガメ監視員の方がそう教えてくれました。また、産卵後、海に戻るの

も、明るいほうを目指して進むので、車のヘッドライトなどの明かりが砂浜沿いの道路についていると誤って道路へ向かうことがあるそうです。それだけでなく、孵化したばかりの子ガメも海と陸を間違えてライトへ向かって行き不運な死を迎えることもあるそうです。

ウミガメの産卵時期には、人の通行はもちろん、近隣の道路も通行制限をし、建物も明かりが漏れないように細心の注意を払うべきです。

最後は、地球温暖化の問題です。近年、注目され、個人レベルでも取り組みが行われていますが、ウミガメも温暖化に奔走させられています。昨年には、沖縄県の久米島でアオウミガメが大量に網にかかり殺害された事件や、温暖化による対馬海流の影響で十月になってまで、北海道でアカウミガメが網にかかって死んでしまったなど悲しいニュースを耳にしました。

温暖化により、これまでの産卵地の海水温や砂浜の温度が上昇し、産卵に適さなくなってしまうということも考えられます。アカウミガメは回遊する際、決まったルートを通ることが多く産卵地も固定ではないものの同じ場所を好むといわれています。温暖化でウミガメが好きなルートで回遊できなくなり、明石に来てくれなくなることを何としても避けなければなりません。

これらのどれが欠けてもウミガメが明石に戻ることは難しいでしょう。

まずは目の前の海のことを知り、興味を持ち続け、曾祖母の時代のように「明石にはウミガメが産卵に来るんだよ」と、ぼくの子供や孫たちが語る未来を迎えられるように、今、ぼくができることを考え、行動していきたいと思えます。